

平成 26 年度 第 2 回静岡市文化振興ビジョン評価等懇話会議事録

- 1 日 時 平成 26 年 8 月 26 日 (火) 10 時～12 時
- 2 場 所 札の辻ビル 5 階 審査会室 1
- 3 出席者 (委 員) 上利会長、川口副会長、入川委員、高岡委員、林委員
(事務局) 小泉参与兼文化振興課長、酒井課長補佐兼企画係長、
三浦副主幹、相馬非常勤嘱託
- 4 傍 聴 者 0 人
- 5 議 題 (1) 静岡市文化振興ビジョンの総合評価について
(2) 静岡市の文化振興の方向性について

6 会議内容

(1) 開会：事務局（三浦）

第 2 回静岡市文化振興ビジョン評価等懇話会の開会を宣言する。

委員の過半数以上の出席があるため、会議が成立していること及び傍聴者が 0 名であることを報告する。

今回の議事録署名人を、上利会長、入川委員に依頼し、両名から承諾を得た。また、第 1 回静岡市文化振興ビジョン評価等懇話会議事録について、本日、上利会長及び高岡委員の署名を受けたあと公開することを報告した。

(2) 議事：議題 1 『静岡市文化振興ビジョンの総合評価について』

- ・上利会長：事務局に説明を依頼する。
- ・事務局（酒井）

第 1 回静岡市文化振興ビジョン評価等懇話会において、質問・意見等があった 3 点について、まず説明を行った。

①事業番号No.12203「伝統芸能公演への支援」について、市民文化祭の伝統芸能公演に対し、どの程度の人が集まったのか資料を提示した。

②欠番となっている事業について、第 1 期実施計画から第 2 期実施計画になるにあたり削除された事業があるため、中間評価時の自己評価を参考として総合評価に含めてもらうよう、資料の追加について説明した。

③事業番号No.22101「行政における文化的視点の導入促進」について、都市計画課等が組織する庁内会議等に参画しているという実績もあることから、未実施事業として扱わないことについて説明した。

- ・上利会長：各委員に質問・意見を問う。
- ・上利会長

欠番になったものは事業が終わったからということかもしれないが、例えば

「アーカイブを作る」ということについて、ホームページで公開することとなっているが、公開することについては終わったとしても、それ以降もこれが活用されていけば、それはそれで維持しているとし、ホームページであればヒット数というか、何人くらい見に来た等も測れるので、完全に終わったとするのではなく、事業が持続しているということではないのか。それならそれで載せたほうが、やっている活動がより見えていいような気もするが、他のものについても、わりとそれが当てはまることも多いと思うがどうか。

・事務局（酒井）

前回の説明で、事業が終わったものがあると説明させていただいたが、そればかりではなく、調べてみるといろいろな経緯があり、「事業の継続について検討中」というものや、当時これは明らかにやる見込みがないと判断し、第1期から第2期に移る時に削除したような経緯がある。個々の具体的な事業について一つひとつ理由を付して削除したという経過がないため、なかなか追いきれなかったところだ。結論だけ言うと、第1期から第2期に移る時に削除したというような形になっている。

・上利会長

一端終了しても、なおずっと持続されているものがあれば、それを明確にしたほうが評価をする上ではいいのではないか。後の判断はお任せする。

・上利会長：各委員に質問・意見を問う。引き続き事務局へ説明を依頼する。

・事務局（酒井）

資料のうち、「静岡市文化振興ビジョン評価シート」を用いて、施策の体系の方向ごとにまとめた、委員からの意見について説明。

目標1『しずおかの風土につちかわれた歴史と文化の伝承』について、方策、展開方法、施策イメージ例、評価と課題①、②、③に基づき、この方向の評価についてまとめたシートについて説明。

・上利会長：各委員に質問・意見を問う。

・上利会長

「目標1」は静岡の歴史文化だが、その中でも二つに分かれていて、「文化財の問題」とか「伝統文化の継承」について、特にこれが重要であったというようなことが見えてくるといいのだが。どこの市がやっても同じようなことになってしまうかもしれないが、「しずおかの風土につちかわれた」と「目標1」には謳ってあるので、10年前にやったものと理念的にはあまり変わらないのかもしれないが、具体的な活動というか、ビジョンに従った事業を行っていく中で、これは非常に重要であるというようなことがわかってくるとよいのではないか。逆に課題として、ここが少し欠けているのではないかとか、気付くことがあれば、今後の問題にもかかわるので、事務局だけでなく委員の皆様も気付くこと、考えていることがあればお話いただきたい。

・事務局（酒井）

全体的な話に通じる部分で非常に難しいテーマであるが、事務局としては評価をやっていく中で、今後の方向性の話にも通じていくが、どこに重点を置く

かというところ、あるいは一つは評価の方法、それから推進体制、こういったところについては、今の文化振興ビジョンでは、若干欠けているのではという気はしている。説明した「目標1」についても、この事業は特にとりものものをビジョンとしては定めていないため、のっぺりとした、どれもやったかやらないかというような評価しかできず、ただ〇がついているだけというものになっているため、ぜひ次の計画策定にあたり改善していきたい。

- 上利会長

例えば文化財の問題、目標1-1の「文化財の保護」については、二つないし三つくらいのポイントがあり、まず静岡市にある文化財がちゃんと保護、整理、保存されているのかどうかという問題について。それからもう一つは、市民への活用として、どうかかわったかという問題、その間を繋ぐところに、大切なものだという意識の高揚を図るといったものがあり、どの部分がうまくいって、どこが欠けているかという色合いがわかるといいのではないかと。

- 事務局（酒井）

どの部分も大事だということとそれまでになってしまうが、これはというのを挙げるのは難しい。

- 上利会長

何が大事かではなくて、うまくいっているのはどれかということ。それは、今後の予算配分の問題にもかかわってくる。ここは今までどおりうまくやっている、これは足りないからここを今度は集中的にやろうとか、そういうことがわかると評価として顔がよくわかるのではないかと。今、回答が難しければ、整理して、第3回に見せていただきたい。

- 事務局（文化振興課長）

次回、ビジョンによってしっかり伸びてちゃんとした成果がある、あるいはビジョンにはこうあったがこれは課題であるというメリハリというような部分について、事務局としてまとめて報告させていただく。ここで言わせていただくと、一つは登呂博のリニューアルについて、体験展示というのを重点的にやることにより、入場者が伸びたというものは成果として出ている。それぞれすべて大事なのだが、その中でメリハリということを経理のほうで考えて報告させていただく。

- 上利会長

以降のことに関しても、そういうことがわかるように次回報告いただきたい。

- 川口委員

全般に言えることとして、評価として難しいのは、全部品質なのか、内容とか動きが項目によって違うはずなので、どれがやはり重点的にやるのかということがわかれば、それに対して評価することが重要で、マイナーなものは評価が低くてもいいのではないかと。あまりにも項目が多いから、困っている。みんな課を拾って、それを上に引っ張り上げなくてはならないという変な平等主義があり、そういうことを全部やればいいのかもわからないが、これから益々やれない時代になる。項目に対して文化振興課でイニシアチブをとるのは大変

だが、全体に静岡市の総合計画なども考慮したうえであるならばできなくもないのでは。

・上利会長：事務局に説明を依頼する。

・事務局（酒井）

目標2『地域性豊かな市民文化の創造』について、方策、展開方法、施策イメージ例、評価と課題①、②、③に基づき、この方向の評価についてまとめたシートについて説明。

・上利会長：各委員に質問・意見を問う。

《 委員からの質問・意見なし 》

・上利会長：事務局に説明を依頼する。

・事務局（酒井）

目標3『しずおかの文化の創造と発信』について、方策、展開方法、施策イメージ例、評価と課題①、②に基づき、この方向の評価についてまとめたシートについて説明。

・上利会長：各委員に質問・意見を問う。

・上利会長

あらかじめ質問したほうが良かったが、「目標2」のところから少し気になっていたことがある。説明の中で「上質な文化」ということを何度か繰り返していたが、例えば静岡市の中で、二丁町のように遊郭というのがあったわけだが、最近、観光・交流のことでいうと、ブラックツーリズムというのが流行になっていて、それはつまり広島原爆ドームとか、沖縄のガマのあとであるとか。文化というのは、プラスだけではなくてマイナスのものもあり、それも重要な遺産ではないかという考え方がわりと広く言われるようになってきている。観光と言っても、観光の「こう」は光、つまりすばらしいものを見に行くという意味だが、ブラックのものを見に行くのもけっこう重要ではないかと言われ始めている。これをどうすればいいのか。文化振興課で、これを文化振興することはできないが、ただ、地域資源ということが「目標2」の中にあるが、そういうことを地域資源として保護とか整備をしていくとか。このことを、シンガポールにいた時に非常に強く感じたが、シンガポールは港町のため、当然遊郭があり、そこをものすごくメインにおいて観光客がいっぱい集まっている。街を保存していて、当時の写真とかいっぱい用意してある。ああいうやり方もあるなと感じ入ったことがあるのだが、ここで言うべきではなかったかもしれない。

・林委員

当時、昔の話として言われてきたことで、確かにある一角は極端にそういうところがあり、それに続く街に同和地区があった。町名も何も全部無くした。それぞれ、そういう過去がある。よそへ行くと、ここはというところがあるが、静岡はこれを合わせて消した。

・上利会長

防災センターの近くに、二丁町の碑がある。碑というか説明文みたいなもの

だが。

- ・林委員

歳の離れた兄が学校の帰りに、そこを通過してはいけないと言われたと。何故かという、看板や写真がずらっと飾ってあったということを知ったことがある。

- ・上利会長

他にも戦争の跡の問題であるとか、そういう保護の問題。ただ歴史文化というのは、こういうすばらしいものがあつたということだけでなく、例えば宿場でも、当然そこには飯女とかがいたということもあり、そういうものをどうするのかということも気になっている。

- ・事務局（酒井）

今までの行政では、例えば文化振興ビジョン的な堅苦しい考えになり、そういったものを取り入れる余地がなかったかもしれないが、今、聞いてみると、これからは具体的にそういうものもおもしろいのではないかと個人的には思っている。文化にとらわれず、観光という面からもタイアップして、文化観光という側面からそういったものにも幅を広げてもおもしろいかなというところで聞かせていただいた。

- ・川口委員

実際、教育委員会なんかでそういうのを取り上げているとか、そういう研究をしているとか、資料収集とかは未だかつてないのか。

- ・事務局（文化振興課長）

多分、表立ってはいない。

- ・川口委員

例えば映画などの文化をやっていると、そういうのがもっと見えてくる。オランダのアムステルダムはどうしているのだろうか。実際に、普通の観光客も見えるわけだし、その昔でいう遊郭について、堂々と昼間からあつて夜になるとネオンが輝いてというのはまさに観光事業だと。パンフレットに載っている場合と載っていない場合があるが、文化の違いということで済むのかどうか難しい。

- ・上利会長

「目標2」の市民活動の支援というところとも関係するが、市民活動の中で文化と呼べるのかということはいくつ議論がある。例えば今、映画ということが出たが、七間町の映画館のところのスズラン通りも、当時はやはり小さい子が行ってはいけないような雰囲気があり、だから文化というのは猥雑なものがどこかに含まれていたりすることがよくあるわけで、そういうものが市民の文化として活性化するわけなので、そこで支援の関係が難しく、だから税金を使うとそういうところにお金を使っていいのかという話にもなるわけで。先ほどのダンスの問題と多分関係している。線引きは非常に難しい問題だが、それを入れていかないと時代にうまく合っていないのではないかと。

- ・川口委員

せつかくなので、静岡市で最初にやるということはどうか。

・事務局（酒井）

後ほどまた今後の方向性のところでも、説明をさせていただく。

・林委員

おそらく戦後、街をきれいにしてしまおうという意識がすごく強くて、青葉公園の屋台街とか、静岡の特色と言われていたものを全部消してしまった。

・川口委員

浮世絵の春画などの評価もだんだん変わってきた。最近話題の、ロンドンでやって、日本では公立の美術館では開催できないと、ロンドンのナショナルギャラリーがやっているものを逆輸入したらどうかという論評が、雑誌なんかには出ている。そもそもこれは人気があって浮世絵といえ、美しい風景や人物画だけではない。日本は負と言うかもしれないが、難しい問題だ。

でもそれを、負とはみんな言っていないというのがある。負でないから取り上げる、でも負と言ったら取り上げられない。負というのは隠すとか。なにか、教育委員会であげるといい。

・入川委員

話がずれるかもしれないが、先ほど負の遺産ということと、会長のほうから戦争という話が出たが、知り合いの方で伝馬町にある戦争の資料センターがあって、そこをもう少ししっかりとしたセンターでなくて会館というか、そういう方向にしていきたいという気持ちはあるみたいだが、そこを借りている家賃は市が出しているという話は聞いている。

・事務局（文化振興課長）

補助金として、市がその部分は出しているという事実はある。

・入川委員

それ以外は、ほとんどボランティアの方たちの手弁当的な活動になっている。それも大きな負の遺産として、静岡市として今後どのように協力してもらえるのか。

・事務局（文化振興課長）

多分そこは、負というよりも歴史的な検証をするという形で捉えている。

・上利会長

公共のものにして欲しいという申請を何度かしてきて、それが受け入れられなくて、その結果だという。授業の中では、そういうところを見に行けということによく言っている。ああいうものは公共のほうでちゃんとしたほうがいいのではないか。

・林委員

同じ意見だ。お金を出すだけでなく、本格的に静岡のいわゆる戦時下の正確な資料を収集してそれなりの展開をしないと、市が出資している以上は、本当に皆さんが納得するような広範な資料や展示物とか、あるいは正しく歴史的検証のできる研究者による説明とか、そういうことができるようになれば、活用されるのではないかと心配している。

- ・上利会長

どこの管轄なのかよくわからないが、いい音楽やいい絵を見にいこうというだけではなく、自分たちが、これから特に若い人達が、どこへ向けて生きていくべきかを考える時に、そういう事実をちゃんと知っておかなければいけない。極端なことを言えば、鹿児島を知覧は特攻隊に関係し、ゼロ戦などのボロボロになったものが置いてあり、そこへ行くとみんな若い人も暗い顔をして出てくるが、このことがすごく重要だと思う。いくつもそういうところがあるので、静岡でもせっかくそういうことをやっている人がいるのだから、それをどうにかうまく継承して若い人達も戦争のことを、もう少し身近に考えられればと思うが。

- ・上利会長：事務局に全体説明を依頼

- ・事務局（酒井）

全体的な評価について説明。

- ・上利会長：各委員に質問・意見を問う。

- ・上利会長

私自身は個別なものより全体的なことに関心があり、それに関しては、あらかじめ事務局の方にメールで意見等を送り、全体の総合評価のところを組み入れてもらうよう参考のために出した。この全体評価に関してはどうか。

- ・川口委員

それぞれの課が項目を出した時に、その中で似たような事業というのは、やはりお互いの課でやらないように配慮するのか。事業出しをするときに調整したり、中間のときに同じものがからんでいるからこっちは部署としてはやめようとか、そういうような情報交換というものは行政の中であるのか。

- ・事務局（酒井）

もともと各課が事業をわけて実施しているので、基本的にはダブリはほとんどない。若干事務局のほうで事業出しをしている中で、これは被っている、類似している事業であるとか、若干の調整は図っている。

- ・川口委員

もちろんそれは予算のからみにも関係するのか。

- ・事務局（酒井）：はい。

- ・川口委員

どれが重点かというのはそれぞれの課が事業出しをする時に、やはり一番自分の課としてはやらなくてはならない、あるいはやりたいというようなものを出さないと、逆に文化振興課だけで決定するわけにはいかないだろう。事業出しの時に、そういうような情報提供をすることが次からは必要なのではないか

こういう中で例えば一番わかりやすいのは、静岡市が天守閣を作りといった時に、実はすごく大きな問題であり、一つの課ではできないと思うが、本当に行政の重点プロジェクトに位置するかもしれない様なビックプロジェクトに対しては、どのように振り分けるのか。実際にそれをやると決めたわけではないから載ってはいないが、よく話題になることであるが、例えば、お城の天守

閣を例にして教えていただけるとよい。

- ・事務局（酒井）

例えば、天守閣クラスのやるやらないはともかくとして、あれほどのクラスという、まず市の総合計画という一番の上位計画があるため、まずそこに位置付けられる。なおかつ、文化的な側面から事業ということで位置付けをされれば、こういった文化の計画のほうにも当然位置付けられていく。総合計画と連動しながら、その事業を推進していくという形になる。

- ・川口委員

それにかかわらず、例えば昔の駿府城の歴史的な遺構調査みたいなものを作るわけだが、それは別に天守閣を作る作らないに関係なくやっているのでは。基礎がどうなっていたとか。

- ・事務局（酒井）

それはもちろん、天守閣うんぬんにかかわらず。天守閣とか、第3次総合計画を策定中で、大きなビックプロジェクトについては、その中に位置付けされるのかというところで、トップの判断等もあるが、まずそこから始まる。予算にも限りがあるので、AというビックなものをやるとBができないみたいなこともあるが、その辺のバランスというか、アセットマネジメントというか、そういうものを含めていろいろと調整が必要になる。

- ・川口委員

文化振興はそうなっているのではないか。予算がないから、どれかを削って結局重要なものだけ残すという。今は豊かな時代だからみんな入っているような気がするが、これしかできないというものだけならば、見る項目が少ないので評価も楽になるのではないか。

- ・上利会長

次回の第3回の会議で、評価の文言についておおよそが確定されると思うが、全体の評価を事務局のほうでまとめるにあたり、概ね良好にやったということだけではなく、もう少し皆さんのアイディアや意見を反映したほうがいいのではないか。ぜひいろいろな考えがあれば出してもらえれば、総合評価としてできるものも豊かになるのではないか

- ・林委員

例えば静岡の図書館B-n e s tについて、あそこは元々ビジネスに特化していたが、最近是非常に傾向が薄くなったという評価を聞いている。始めはそれをもっと応援する意味で、静大生が入ったり、アイディアを出したりしていたが、今はすっかり引いてしまっていて、そういうものを需要する体質があるのかどうかというのがとても気になっている。図書館というのは大きな文化事業の一つなので、その点が気になっている。

もう一つは静岡市の文化会館について、あれは耐震が危ないと言われているが建て直すのか。実際にはマリナートも、逆に津波が来たら一気だ。あそこを使うたびに、これで津波が来たら終わりだと思う。また事業についても市民の不評がすごく多い。たいした事業が来ていないというようにとられている。い

いわゆる「四季」をやるだけの話ではなく、文化の香り高いものが、全部焼津、富士に行ってしまっているという不満を聞く。そういう意味で、街の最高の位置にありながら、やがてどうしようとするのか。いわゆる文化活動の拠点について、総合計画の中で充分打ちあげていかなければならない問題だと思うがどうか。

・事務局（酒井）

文化会館については老朽化あるいは耐震が進んでいるため、文化振興課としてはもちろんクリアしなくてはならない課題と考えている。やはり 35～6 年経つと、いつどうなってもという状況になっているが、やはり大きな予算を伴うため、市が抱えている他の部分を含め、やらなければならないビックな事業があるため、文化振興課としては主張し続けているのは事実なのだが、なかなかそれをやるというところまで至っていない。所管課である文化振興課としては、常に計画を立てて上層部へも働きかけている状況だ。

・林委員

マリナートの運営も、ちょっと違う形をしているということだが、とにかく一度入って使ってみると、事故が起きなくて不思議なくらいだ。2階から3階に上がっていくところとか、とにかく2階に上がる時から小さなエレベーターが一つしかなく、高齢者が大勢使う時などは、それがあるから集まらない。せめてエスカレーターでもあったり、もっと入口に近いところにエレベーターが設置されていたら、今時どうしてこんな形で作ったのか、やさしくないと言われている。その辺の改修も必要でないか。

・高岡委員

出来上がった時に、こういうところにこういう掲示がほしいという現場の声があっても、設計者の意向があつてなかなかそういうことができないと聞いた。現場の人や市民が気付いたりしても、それが反映されないシステムというのはおかしくないか、誰の施設なのか。

・林委員

トイレの位置も全部違う。だから、どこへ行っていいのかわからなくなってしまふ。

・川口委員

ユニバーサルとか何かも考えないでいて、今は、そんなに設計者が強くなっていないのでは。設計するときそういうものが入ってないとならないので。

・林委員

この時代に、あそこに今オープンして、よく通ったなと思う。

・川口委員

あの時代は、欠陥の建物が多い。あともう一つ一番問題なのが、耐震的にも古いので、今の新基準からすると。

マリナートの評判が悪いと困ってしまう。PFI という、安く運営管理もやるということであったから、応募者も少なくなってしまったのでは。PFI の悪いところが出てしまったのでは。建設も民間、維持も民間ということで、そ

れを裏返すと行政がお金を出さなくても公共施設を作れるということで、競争入札しないでやったということがあるのかもしれない。一社しか手を挙げなかったという。

- ・上利会長

マリナートはよく使うが、音響はわりといい。問題は、そこに力を入れて、トイレも迷路みたいになっていて、なかなかそちらに配慮がなかったというのはある。

- ・林委員

客席がすごく長く、中央に入ると出られないくらい猛烈に長い。音響も中央に座ると講演をすごく聴きにくい。いわゆる残響を考えているので、逆にワンワンして、端のほうに座らないと聞こえない。それについても、散々文句を聞いている。

- ・上利会長

マリナートのいろんな問題が市民の方から寄せられて、それをどのように反映していけるのか。もちろん大掛かりな改修となるとお金もかかるわけだが、ただ声がいろいろある時に、聞きっぱなしというわけにもいかない。今後どうするのかということがある。

文化会館については、一度仕分けで問題となったわけだが、仕分けのその後はどうなったのか。そのことも含めた対応というのは、文化振興課としては出来るだけそれを活用するとか、あるいは新しいのを作るとかそういう前向きであると思うが、市全体としてはどういう位置付けになっているのか。

- ・事務局（文化振興課長）

文化会館に関しては、一度仕分けで廃止という判断が出たが、市としてはやはりこれは必要だと捉え、このままの体制ではなく、今後、運営や存在を見直しながら、改善をしていくという結論になった。廃止という考えは、市としては無くなった。ただ今後、30数年経ち耐震も心配なため、いかに対応していくかが必要で、文化振興課としては、早くなんとかしたいという意識は持っている。市全体でアセットマネジメントという考え方があり、今ある施設をすべて今までどおり維持していくと、それだけ維持運営のお金がかかるため、財政状況を考えると、必要に応じてこの施設はこのままの状態で作る、あるいは縮小していくという形で、市全体で見直すこととしている。その中で文化会館を改修するのか、建て直して例えば縮小するのかなど、いろいろな選択肢があるが、今度はその耐震だけでなくアセットマネジメントとして、施設の管理の面からも考えてくということ、これについては来年度あたりに、市だけではなく、外からの意見を伺いながら評価をし、方向性を決めていこうと考えている。意識としては非常に持っている、なかなか進まないが、引き続き方向性を考えていく。

- ・上利会長

この問題はマリナートだけではなく、市役所としてどういう活動をするかという問題と、基本的には市役所というところは市民のいろいろな生活、活動を

支援していくという役割を持っているため、マリナートではこういう不満がでたとか、文化会館はどうなのかという話があった時に、ここの関係をうまく作っていかないとならない。市民の意見を反映するというのを言ったが、このやりとりをどういうようにやっていくのかということだ。

・事務局（文化振興課長）

施設を使用している方からのアンケートとかにより、大規模のものは難しいかもしれないが、トイレがわかりにくいとなると直接的ではないがサインをたくさんつけていくといったように、市民の声については反映できる部分はしている。今後も、何らかの形での市民からの声に対し、反映するための努力はしていくということで、スタンスとしては今までと変わらないが、それについての仕組みがあれば検討していきたい。

・上利会長

たぶんそこをこれからちゃんとやらないといけない。今までのような市民の上に役所があって、役所が面倒みますよという体制ではなく、市民が文化の振興にどう関わっていくのかということ、その仕組み作りがこれから必要だ。

・事務局（文化振興課長）

そういう仕組みを、ビジョンというのか今後の方向性の中に入れていく必要がある。

・上利会長

意見があるから何か作るという話があったが、基本的には意見をどう集約するかということの方が大切で、まずは普通にアンケートみたいなものがある。イベントがあるとアンケートをとるということも必要だが、それは来た人の意見が反映されているわけで、来ない人の意見は反映されない。とすると、市民全体の意見を集約しているわけではなく、例えばあるイベントで、90%がすばらしかったと言っているから、これは市民の90%が支援している、賛同しているというわけではなく、関心がない人が実は90%いるかもしれないという、このあたりの仕組みをどうするかということが一つある。

例えばホームページなどで、意見があればということで書き込みをする。書き込みをするのにも勇気がいるのかもしれないが、そういう仕組みは何かあるのか。市のホームページを見ることがあるが、市によっては、何か意見があればお寄せくださいと書いてメールで書き込むことができるが、それがいいのか。

・事務局（文化振興課長）

「市民の声」というホームページがある。そこに書き込むと、必ずそれについての返事を返すことになっている。できる部分については対応したとか、考え方はこうだということで、返信を希望する方には必ず返信をするし、返信を希望しない場合にも、こういう形にしましたという結果の公表はしている。

・上利会長

活用されているということによろしいか。

・事務局（文化振興課長）

活用されていると考えている。

- 上利会長
図書館の件はどうか。
- 事務局（文化振興課長）
B-n e s t の件については、強みの図書館にするという形で作ったわけだが、最近薄れているということについては、教育委員会の所管になるので、そのような話があったということは伝えさせていただく。
- 林委員
非常に薄くなったと、利用者から聞いている。
- 事務局（文化振興課長）
B-n e s t が上にあるため、産業とか経済の關係に強い経済書をとというスタンスだったが。
- 林委員
作るときにそういう約束だった。
- 上利会長：他に意見を問う。
- 高岡委員
行政としてのビジョンというか、静岡市として見たときに行政がやっていることだけではないという、例えば美術の世界でいえば、市民文化会館、市の美術館もあるし、マリナートもあるが、市民がやる民間ギャラリーとかもいろいろある。そういうものを含め、美術の世界だったら、市民が楽しめる環境だと思いが、そういうことを踏まえたビジョンになってほしい。先ほどの資料館も、行政がやることにこしたことはないが、そうやって支えている市民の方たちがたくさんいるということも、静岡市の宝だ。財産というか、そういう視点があるといい。
- 上利会長
文化ビジョンの 50 ページに、つまり主体が誰かというときに、役所である行政だけではなく、市民とか大学であるとか、企業とか文化団体とかそういうものがあることが書かれている。例えば美術というものは、公共の場で行政が管理するような場のものもあるし、民間ギャラリーもあるし、もっと一般的に個人で楽しむようなケースがあって、それをトータルとして文化と呼ぶべきで、この時に行政が、更にそこにどうかかわっていくのか、あるいは行政だけでなく企業でもそうだし、一般の人達もどうかかわっていくのかという、この仕組みを上手く作っていかなければいけないが、評価シートを見ると、やりました、やっていませんというのはすべて役所の課になっている。つまり主体は、市民も企業もそうだと言いながら、評価に関してはすべて行政になっているという関係がわからない。このような行政が主導する文化活動というものは、戦後日本ではかなり広くやられたわけだが、もはやそれではなくて次の段階に進むべきで、市民の活動とどう手を携えていくのかということが問われている。今回の評価の中にそれを含めるのは難しいだろうが、これ以降の方向性のところで、そういう議論をやっていただきたい。
- 川口委員

静岡で言うと文化財団とか、任せられる組織があるかないかというのが重要で、日本の場合はやはりまだ役所がまとめないとどうにもならない。例えば音楽の団体だと、音楽のNPOなのか文化財団なのか、役所と違った組織が音楽に関する一連の事業を統括するとか。実は、建築とかそういう分野でいうと、それ自体大きな組織があって、役所からも外れていてそこには館長もいる組織であるが、ただし予算だけは行政からもらうというように、独立性が高いというか運用性が高い、そういうようなことができていないと。51 ページに書いてあることを市がやるのは、要するに市民団体が育っていない状況だから、どこかが窓口になるというのが現状なのか。そういう意味では、名目上は市民とか、正に 50 ページの 5 つの協働とあるが、過渡期なのかあるいは、だんだんと権限委譲ではないけれども、市民団体に委譲するような方向へ持っていくための施策を展開していくというようなことなのか。やはりどっちどっちというか、民度というか市民度として難しい時期なのではないか。自主財源というか、音楽事業の場合には、一つの組織に任せ、例えば市民会館を作るとか一様の運営全部ができ、もっと市民主体の活動にも全部関わっていけるような組織があればいいが、ここが問題ではないか。そのままでいいのかという問いがあるので、組織的なことをどうしたらいいかというのが、この文化施策なのかかもしれない。

高岡さんがやっている文化組織なども、ある意味では中途半端に任されているような状況という、たぶんこういうことは静岡市だけじゃなくて普段からあるのではないか。本当に信頼されているならば、財源としてみなこれをやるから好きに使えというふうにはなっていないだろうと。項目を出してそれに対して補助申請というか、例えば前年度こうだったから今年もこうというようなやり方で、踏襲性というかそういうプログラムになっている。

- ・林委員

そういうことに慣れてなかったのではないか。日本人は、今まで全部行政がやってくれるというのに乗っかっていた傾向がある。

- ・川口委員

欧米がやりやすいのは、隣の国が近いからやらざるを得ないという、つまりよその国、例えば韓国とか中国が入ってきたときに、協働してやらざるを得ない。人の行き来が激しいから、お前のところの独自でもって語られないというのがある。国によって状況が違うので、欧米ができたからできるというわけではなくて難しいところだ。

- ・林委員

指定管理者制度というのは、正に途中という気がする。

- ・上利会長

いわゆる文化づくりが明治から始まって、市民文化が育ってきたところに戦争を挟むわけだが、その地方の行政が協会・連盟などの形で集約していった傘をかける。それが文化支援と考えられていた時期があるわけで、日本では、市民文化というものまで醸成されることがなかったのか、とりあえず護衛を行政がしていたと。ここからもう、手放さなければいけないというか、そうしなけ

れば、多分行政的な文化振興といっても、もうこちらはこちらでやりますよと、どんどん市民がやっていくようになってしまう。それだけではいけないので、その環境をこれからうまく作っていくことを考えていかなければならない。昭和的な文化づくりは止めて、新しいタイプのものを。学生と話をして、学生たちはずっとネットとかSNSを使ってやっていて、我々が物事を発信・交流するというときには、チラシを作ってどこかに置きましょうとか昭和的な発想をするのだが、彼らはもうツイッターとかを利用してやっている。ツールが違うわけだから、若い人たちに対する教養的な文化ではないもっとアミューズメントの面も含めたやり方を含めながらも、一緒にだけ昭和的な文化のよさというのをちゃんと理解してもらうように、どう関係づくりをしていくかすごく重要になる。

(3) 議事：議題2『静岡市の文化振興の方向性について』

- ・上利会長：事務局に説明を依頼する。

- ・事務局（酒井）

資料のうち、「文化振興のための条例の制定状況」、「政令市等条例比較表」等を用いて、今後の文化振興の方向性（案）について説明。

- ・上利会長

総合計画との関係でいうと、95 ページのところがこの担当ということか。「多彩な文化の継承」と「独自文化の創造」ということになるわけだが、総合計画だけで見ると、説明にあったように大変薄くてここだけを頼りに文化振興を行うのはちょっと難しいだろう。気になるのが、この三つの順番について文化振興ビジョンが先にできていると思うが、それとも順番が違うし、何か連携ができていないのではないかという感じを受けるが、目標が三つあって、その下の文言はだいたい拾っている。他市、他県の文化条例の様子ということで、個人的に見るとこういうのがあるとなかなかいいのではないか。作っていくのかという議論も必要だが、静岡市の文化振興課というか、振興ビジョンというのか、総合計画と条例との間で、こんな感じに位置付けるということになるのか。議論の方向としてはどこを目標にポイントを置けばよろしいか。

- ・事務局（酒井）

文化振興課の事務局としては、やはり先ほどの説明にもあるように、不変的な基本方針を定め、何十年とそういった状況の変化があっても、それに左右されない条例をまず位置付け、これからの文化振興を進めていきたい。その条例に位置付けて、なおかつ今の文化振興ビジョンで課題となっている評価とか、全体的な長期的な評価とか、あるいは市民等を入れた推進体制とか、そういったものを今度はクリアできるような、反映できるような条例に基づく計画を作っていきたい。

- ・上利会長

中長期的な理念的な核になる条例を作ると同時に、推進体制と評価体制についても議論したほうがよいということか。

- ・事務局（酒井）

条例を作っていけば、当然その条例に。条例はあくまで理念を定めるものであり、それに基づく計画を作っていくという形になるので、それは当然入っていくという形になる。
- ・上利会長

条例を作るかどうかの議論なのか、条例の中で具体的な内容として書くものを検討するかでだいぶ違うわけだが、推進体制、評価体制が違うところをどうしましょうかという話なのか、どちらを議論すればよろしいか。
- ・事務局（酒井）

まずは、この事務局が提案した条例を作ることにお願いしたい。
- ・上利会長

条例に基づいて、ビジョンをこれから作るなら作るということか。おおよそ、この数年内にこれが作られているようだが、作られて以降どうかということは、今ここで聞いてはいけないか。
- ・事務局（酒井）

条例と計画を取り寄せてこの表を作っているため、担当者と直接出向いて詳細を聞いているわけではないので、今の最新の、例えば条例を作ったどうかということは把握していない。
- ・上利会長

評価・点検のところで、これがどの程度の、例えば年度ごとでやるのか、もっと中期的にやるのかわからないが、そういうものが載っていたりしないのか。
- ・事務局（酒井）

例えば、さいたま市なんかで言っているのは、これは10年後の終わりのイメージで、平成32年度までに25%になるというもの。
- ・上利会長

あまり細かい評価シートのようなものを作って、年度ごとというのではなくて、もう少し中期的にもものを見ているということか。
- ・事務局（酒井）

審議会などを、年に1回か2回開催し、そういうもので進捗管理等はしていると思われる。
- ・上利会長

条例を作ったときに、それが足かせになるようなことがあるのかどうか。できてから期間が短いので、まだそんなことはわからないのではないかと思うが、足かせにならなければ、条例を作るということは前向きで、こう明確に何かを打ち出すということはいいのではないか。長期的なものというのと、どういうふうになっていくのかという意味で不安がある。
- ・上利会長

今作っているビジョンと条例だと、どういう違いがあるのか。単に、ビジョンだけでいいのではないかという考えに対して、条例があるほうがいいというのは何かあるのか。長期的なという言葉を使っていたが。

- ・事務局（酒井）
最大の違いは、やはりさっきも述べたように、継続性が担保される。例えば、市長が代わるとか、総合計画がこのように切り替わったとしても、条例として位置付けているため、文化振興の基本的な方向性は不変的なものであり、基本的には変わらないということになる。行政だけではもちろんいけないが、文化振興の方向性を、より一層明確に打ち出すということが可能になるということだ。
- ・上利会長
明確というのは、どういう意味においてか。
- ・事務局（酒井）
理念というか、静岡市の文化振興はこういった方向で、そのためにはこういった課題があって、こういうことをクリアするために進めていくといったような。
- ・上利会長
ビジョンではだめなのか。
- ・事務局（酒井）
ビジョンよりもメッセージ性が強くなるのではというところはある。
- ・上利会長
条例の方が確かにそうなのだが、理念ということについては、ビジョンでもかなりつめているわけだが、もっと、目に見える形でということか。
- ・事務局（酒井）：市民とか、対外的にという。
- ・上利会長
ビジョンを作ってきたが、割とうまくいっているので、それを更に明確な形にワンステップ上がろうというイメージでよろしいか。
- ・事務局：はい。
- ・上利会長
そういう言い方をすると、いいですねということになる。
- ・林委員
条例がなければ進まないという言い方もある。
- ・上利会長
一番心配しているのが、推進体制と評価ということが上手くいかなくなった時に、長期的だと困るのではないかと思ったが、今の説明だと、条例とはまたちょっと下位の部分で、そこはまた、修正できるということか。
- ・事務局（酒井）：はい。
- ・上利会長
定義として、漫画とかいろいろなものが出てきているが、これが時代の中で浮上するというのはわかるのだが、長期的な展望の中に、こういうことを謳い上げると、逆にここに入っていないものであるとか、今まではこれとはいうものの対応が難しくなるのではないか。
- ・事務局（酒井）

ただ幅広く定義もしているのもとも伝統文化だとか、茶道だとか、そういうものに加え、いわゆる今風のものを取り入れるようなイメージでいるので、受け皿としては大きく持てるのではないかという印象は持っている。今後、予想もしなかった、これも文化だというものが出てくる可能性もあり、一概に否定はできないが、風呂敷としては広げるということだ。

- 上利会長

街の文化というのは多様ではあるが、ここに上がっているのが音楽だ、美術だという、いわゆるヨーロッパ的な近代芸術文化になっている。街が文化的であるというのは、人がそこに住んでいて安らぎであるとか、楽しさを感じとる場でなければならない。言ってみれば、家のようなというか、アットホームな感じができなければいけない。そうすると、単にそういう明確な文化活動だけでなく、もう少し広げると、人々がここで長い間生きてきたのだという何かそういうものの中で支えられている。例えば神社がそこにあるとか、お寺があるというのも、人に無意識の中に安らぎを与えたりする場であったりするのではないか。更にもう少し広げれば、自然がたくさんあってとても豊かな水を見るとき、最近自然環境に関心を持っていて、人を育てるときに自然に育まれているということと、その上に歴史によって育まれていて、だからこういう活動ができるという、もっとトータルな文化を考えていったほうがいいのではないか。この中でそういうものを探してみると、民族芸能とか無形文化財のようなものがあり、基本的には非常に明確なカテゴリーの中におさまるようなものになっているのだが、そういうことを文化振興課が推進するというところでいいのか。

- 事務局（酒井）

文化芸術の定義・範囲については、条例を作ろうという中で議論を深めていくことになるが、いわゆる自然文化みたいな感じを取り入れることにより「静岡市やるな」と、これは他都市にはないなという面白みが加わってくるかもしれない。その辺は、これからどういったものを文化として静岡市が位置付けていくか、議論を深めていくことになる。

- 上利会長

全体的に、都市化された文化の話をされるが、むしろ静岡市は海も川も山もあるんで、そういうものを取り入れた方がずっといいものになるのだろうが、文化というのはこういうこともあるのではないかということ、上手く吸収できるような条例になっていないとならないのではないかと。

- 林委員

参考になるかわからないが、私が県の生活文化部に居た時、よく「生活文化とは」と問われた。確かに、こういうジャンルではなく、領域というのでも考えていく必要があり、定義をしたほうがよいのでは。

- 川口委員

人文的な従来の文化でない自然というような、例えば自然環境条例なんていうのを考えたときに、そういうものがある。行政的に広げてしまうとやりにくくなってしまっているので、昔でいう人文の文化というか、生活環境というのはいろ

いろいろあり、自然を入れるならば、どちらかといえば部署を変えて、自然保護条例みたいなことで謳って、それでいてそこでは文化という言葉を使ったりする。そういう住み分けをそれぞれ文化各課各担当部局が事務局になってくれているのではないか。

・林委員

どうくくっても、どうしてもこれが入ってこないとか、そういうのが必ず出てくる。だから「等」でくくっているのでは。

・川口委員

ただ、負というか裏の文化みたいなものを、この中に入れようと思えば入れられる。他の都市の政令市なんかやっている限りでは、表立っては見えないが、広く解釈すれば入るのではないか。評価とか点検といった時に、広く自然まで入れてしまうと、総合計画の評価みたいなものになり、何でもありというようになってしまう。例えば都市に関しても、交通だって文化じゃないかというようになると、例えばこの大阪だ、大阪府だというのはそこまで入れなかったとか、人が人を動かしていることも文化ではないかというようにもとれるわけなので、その辺が難しいところだ。

・上利会長

それを入りたい気持ちはあるが、今そこを議論したいわけではなく、今の京都とか大阪の水の文化をどう創るのかというのをいろいろ訪ねていて、「水都大阪」とかやっているわけだが、京都だってきれいな水によって豆腐を作ったりしていて、この条例を作って明確に何かを謳った時に、そこだけ特化をしていくということが、足かせになっていかないかということに心配したというだけの話だ。

・川口委員

今日は、条例を作ったほうがいいかどうかという結論が必要か。

・事務局（文化振興課長）

結論ではなくて、意見を伺えれば結構だ。懇話会としての結論を決定する必要はない。

・川口委員

ビジョンがあって、条例がないと聞けば、条例を作ったらどうかというような気持ちになる。

・上利会長

流れとしては、作ったほうがいいと思うが、ただそうするとデメリットがどこにあるのかをいろいろと考えたい。

・林委員

計画はあっても条例が無いと、なかなか進まないという市町の事情を聞いたことがあったことから、あった方がいいのではないか。

・川口委員

現在、静岡市に問い合わせがある時は、この文化振興ビジョンがあるということで、他都市に資料を出すわけなのか。

- ・上利会長
 県も条例を作って、何かと言う時には、「県の条例ではみる、つくる、ささえるになっています」とか言うが、言い易いのがいい。
- ・入川委員
 例えば札幌市とか、説明された部分で、書いてあるところと書いていない部分があり気になったのだが、特に定めてないということか。
- ・事務局
 条例上は定めてないということ。札幌市は条例は定めているが、条文も少なく、中味も他都市と比べると若干圧縮されているような感じになっている。
- ・入川委員
 ビジョンだと、かなりのページ数があるが、条例となるとどのくらいの分量になるのか。
- ・事務局（酒井）
 市によって様々で、条例は条文で終わるが、その下に位置付ける計画はどれだけ掘り下げていくか、どれだけ細かく決め事をしていくかにより変わる。条例を作るとなれば、事務局としても現文化振興ビジョンで抱えている課題が解決できるようなものを作っていきたい。
- ・川口委員
 京都市を見ると、確かに条例は短いが、次の内訳を見ていくと施策としては、ほとんど全部、今言ったことが入っている。幅広く取り上げていて、京都市の場合は、条例に基づいた基本計画になっている。
- ・上利会長
 これには景観の保全とかが入っていて、私が言いたかったことに近いかもしれない。条例として定める部分と、さらに今の質問にあったように具体的なビジョンに相当するようなものを詰めていく。さらには事業計画、下に落とすその一番上のところをきっちり作りたいということか。
- ・高岡委員
 静岡県芸術祭の役員をやっていて、「ふじのくに芸術祭」というのだが、これはいわゆる文化祭的なものなのか、芸術祭的なものなのかと当局に聞いてみたところ回答がなかった。例えば、そういうものを決めておくということは大切なことで、大道芸も立ち上がりから半分位まで付きあってやってきて、ある時に「大道芸はアートだ」といった発想になった。とりあえずそう言えば偉そうな感じがするからという感じではあったが、本当に芸能というかそういう娯楽的なアミューズメントみたいなものでもいいと思うし、一度そう決めてしまうとどうかという考えもあるが、そういうものを、静岡市としてはこう考えているという基準みたいなものを出していくと、次に進めるのではという気がする。先ほども始まる前に、林先生と話をしたが、いろいろな表現活動、文化活動があって、賑やかな方がいいのだが、それとまた別の次元で、さらに先へというか、さらに高みへというか、そういうものを市民の活動なり意識なりを引っ張っていってくれるものが必要になる。これを区分けしていかないと両面二

つとも大切なので、ぜひ条例があったほうがいいだろう。

- 上利会長

「議題2」の方向性、条例については、一通りの意見交換をしたということで、これで議題を終了ということにしたい。事務局へお返しする。

- 事務局（三浦）

次回日程を調整したところ、10月8日（水）午後1時30分からとする。

以上をもって、第2回静岡市文化振興ビジョン評価等懇話会を終了する。

本日の審議事項が、以上のとおり相違ないことを証明します。

平成 年 月 日

静岡市文化振興ビジョン評価等懇話会会長

議事録署名人：懇話会委員
